

学 校 名	山形市立第七小学校 山形市城北町二丁目 9 番 37 号 TEL 644-3434 FAX 645-8586	校 長	古 澤 博
		研究主任	山川 裕子
研 究 主 題	学びの高まりを求めて、伝え合う力の育成 (1 年次)		
主 題 設 定 の 理 由	本校では昨年度まで校内研究において、「個が生きる学習指導の充実—感じる心、かかわる喜び—」をテーマとして、五感を働かせ、全身で対象にかかわる子どもの育成に取り組んできた。子ども達は、多くの体験を通して、人物・自然文化・社会とかかわる喜びを味わうことができたといえる。また、多様な工夫により、一人一人のよさが発揮された「個が生きる授業づくり」ができたとも考えている。 しかし、一つ一つの研究授業においては、多くの研究成果を見出すことができたものの、多教科での取り組みであるために、成果を別の教科の授業に生かしていくことが難しかったこと、さらに、成果の積み上げが見えにくかったことなどが反省として出された。また、研究へ取り組んだ成果として、学力の伸びが子ども自身にも、教員にも確かな形で見えるものでありたいという要望も出された。 これらの反省を踏まえ、話し合いを重ねた結果、研究の教科を一つに絞ることにした。教科を絞ることで、六年間の発達段階を踏まえた計画的系統的な指導を全教師の共通理解の下、同じ視点で取り組むことを容易にし、子どもの伸びもよりはっきりと見えるようになって考えたのである。また、子どもの実態をみつめ、今必要な、つけるべき力は何かについても時間をかけて話し合い、「聞く」「話す」という伝え合う力を育てていきたいとの方向が決まった。 以上のような経過を経て、本年度の研究の取り組むべき方向が決定し、国語科を窓口にして研究を進めていくこととなった。 国語科における、「聞く」「話す」という伝え合う力の育成は、個の理解や思考を他者にわかるように言語化し、相手から返ってくる言葉を受容・吟味し、納得できなければさらに質問や反論を加える活動を通して育まれていく。考え方や見方が異なる相手（集団）との様々な対話を通すことで、自らの理解や思考の幅を広げ、高め深めていくことができるのである。従って、伝え合う力の育成は、「話す」という表現力を高めることに止まらず、考える力、理解する力をも育むと考える。 「自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力などの資質や能力の育成を重視するこれからの学校教育においては、従来のような知識を教え込むような授業のあり方を改め、子ども達が自分で考えたり自分の言葉で表現したりすることを重視するような指導方法の工夫改善を一層進めていく必要がある。」とは、教育課程審議会中間まとめの		

	文である。本校が目指す、伝え合う力の育成は、正に子ども達が自らの意見を出し合い学び合うという主体的な学びを形成するものであり、自分で課題を見つけ、自ら学び考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決しようとする『生きる力』を育むことに他ならない。また、今後さらに進む国際化社会を生きる子ども達にとって、伝え合う力の育成は社会の要請ともいえる。 このような、伝え合う力の育成には、発言につまずいたり、異なる意見がでたりすることを当然のこととして受け入れる学級づくりが不可欠である。そのためには、子ども達の好ましい人間関係や子ども達と教師との信頼関係が確立した温かい学級の雰囲気作りが必要である。子ども達が安心して自分の考えや意見を言える学級経営のあり方も視野に入れながら、研究を進めていきたいと考えている。	
目 標	1、研究の構想を練り、研究全体計画の構築を図っていく。 2、研究授業を通して、伝え合う力を育むための手立てのあり方、支援のあり方を明らかにしていく。 3、望ましい人間関係を育むための学級経営のあり方を探っていく。	
研 究 計 画	4 月	研究計画・授業計画作成
	5・6 月	研究の構想を練る 研究講演会（国語科、学級経営について 2 回実施）
	7 月	指導案・B E E プラン形式検討
	9 月	全児童へのアンケート調査（1 回目） 研究授業（4 年 1 年 5 年）
	10 月	研究授業（3 年 5 年 6 年 3 年 みつばち 1 年）
	11 月	研究授業（4 年 2 年 5 年 2 年 5 年 6 年）
	12 月	2 学期研究の反省 紀要の形式検討
	1 月	全児童へのアンケート調査（2 回目） 研究授業（3 年 1 年 2 年）
	2 月	アンケート分析
	3 月	紀要完成 研究の総括